
異世界ライフは幸せだろうか

ヴァルハラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ライフは幸せだろうか

【Zコード】

Z9307M

【作者名】

ヴァルハラ

【あらすじ】

絵にかいたような不運な人生、常にぎりぎりの人生を歩んできた高嶺涼介は、高校生活終了の日に、トラックに跳ね飛ばされて人生も終了してしまう。そんな人生を、あまりにかわいそうに思った神様、というかあまりにも申し訳なく思った神様は彼に異世界で第二の人生を与えた。そこは文明ではなく魔法が支配する、魔術の世界。そんな世界に彼は、神様から素敵な能力を授かって転生する。二度目の人生、彼はこんどこそ幸せな人生を歩めるのか。

俺の人生は不幸だつた。

とにかく、何をするにも運が無いのだ。交通事故はそこそこの頻度で起こってしまう。

まあ分かつてはいるからほとんど回避できているわけで、ぼーっとしてると、2・3日に一回死んでいると思う。

俺の人生はここまで18年。この先もできるだけ続けてほしいが、どうなるかは分からない。

……なんとか、高校卒業まで来たな……

卒業証書をカバンの中にしまいこんで、俺は通学路を歩いて家に帰る。

突然、大きなクラクションの音が響いた。

大きな道路だ。すぐ横を車が走っている、まあこんなこともあると思われるが……こんな場合、大抵ひどい目にあいかけるのは俺だ。

「……え？」

だがこんな日に限つて。ようやく卒業できたこんな日に限つて。

「マジか……」

大型のトラックが数台、横滑りにこちらに突っ込んでいた。なんだ、なんなんだ。どんな事故が起これば、そんなに何台もトラックが同時に同じところにめがけて滑つてくるんだ！？

これは、避けられない……

痛みはなかつた。

意識は一瞬にして落ちていった。

えー、あー……あの、あんた、名前は？」

俺は、地面に寝つ転がっていた。

いきなりた。なんだ。夢か。それとも死後の世界といふ世いか。

「高嶺涼介」
たかみねりょうすけ

「そりか……いや、何から話したものか。とりあえず、俺は神だ！」

「は？ 神様？」

「や、そうだ、それ

俺は起き上がりそいつを殴ろうと思った。

俺は人生、何度この神様とやらをぶち殺したいと思つたか……
だが、いかんせん俺の体は地面に寝転んだままピクリとも動いて
くれない。せつかく長年憎み続けた宿願の敵が目の前にいるという

のに、体が動かないとは……

「なぜ、こんなでござんな」

「お前が、ものすごく不運な人生を歩んだのは分かつていて。だがどうしようもなかつたんだ……すまない」とひげ面のクソジジイだと思っていたが、イメージとはだいぶ違う。神様は、すげく申し訳なさそうな顔をして俺を見下ろしている。真つ青な髪の毛に、白を基調とした服を着ている若い男だ。もつ

「すまないじや、ねえよ！ やっぱり俺死んでるんだろー？」

「ああ……だから、お前を別の世界に転生させる。そこで、第2の人生を生きてくれ」

「……いや、いきなりそんなこと言われても……別の世界?」

「そうだ」

「俺のこれまでの人生は?」

「……当然、無駄にはしない。お前がこれまで生きてきた時間、何より何故か空費され続けたお前の持っていたはずの幸運は全て何らかの形で返す」

空費され続けた……？

俺には、幸運とやらが全く無いものだと思っていたが、ある」とにはあつたのか。

「幸運も才能の一つだ。お前が空費した幸運のすべては、これから行く世界で一番重要な才能に全て回してやる。……俺からの、ちよつとした謝罪分も上乗せしてな」

「…………つまり、どうなるんだ?」

「お前がこれから行く世界は、お前が暮らしていた世界とは全く別の位置に存在する異世界だ。常識もまるで違う。そこは文明が支配する世界ではない。お前たちの世界では空想のものとされた魔法が一般的に存在する、魔術の支配する世界だ」

魔術……まじかよ、そんなオカルトも別の世界となると存在しているのか。

「では、簡単に魔法について説明しよう。まあ、俺も詳しくは知らないんだが、どうやら神といつ存在 자체に大きく魔法が関わっているようでな、俺にもちよつとは分かるんだ」

「へー」

「とりあえず、もう動けるだろ?。立ってくれ」

言われて気がついた。

確かに体が動く。俺は言われた通りにその場に立ちあがつた。なんだか肌触りがいいと思っていた地面は、芝生が敷かれているようだ。

「もうすでにお前の空費された幸運は全て魔力にあてられている。いいか、魔法を使う上で必要なのはイメージ力と知識だ」

「ふーん

「その点について我々神は全知全能であるため完全だ。だがお前の場合はそうはいかない。とりあえずなんだ……お前は炎を知っているか?」

完全に俺のことばにバカにしたような質問を言いながら、神様は手のひらの上に炎を出現させた。

ゆらゆらとゆらめいているそれは、まさに炎。手のひらが熱くならないのか心配だ。

「知ってる

と、答えると、「じゃあやつてみろ」と神様は何の説明もなしに言つ。

だが俺も馬鹿じゃない。イメージと知識が必要なんだ。そして俺は炎を知つている。ならば後は、手のひらの上に炎をイメージすればそれで発生するんだろう。

やつてみると実際にあつたり炎は発生した。

マッチ棒に灯るような、ごく小さな火が。

「上出来だ

「え、いや、なんか恥ずかしいな

小さすぎねえか……？

「気にするな、最初はそんなもんだと思うだ？ 普通はそこからイメージ力を鍛えたりするんだと思うが、お前の場合はそんな必要はないから尚更気にするな」

「あ、え？ ああ、分かった……」

俺が答えると、神様は「よし」とだけ言い、手のひらの上でゆらめいていた炎を消した。

そしてこちらに歩み寄つてくる。

「これから、俺が力をやる。具体的には、魔力補正とイメージ力の補正だ」

「すまん、よく分からない」

「つまり無限の魔力と、一瞬にして具現化にまでつなげられるほどのイメージ力だ」

「ち、チートじゃねえか！」

神様は手のひらをこちらに向けた。

少しすると、神様の手のひらに輝く光の球が出現した。大きさはテニスボールくらいだ。これが、神様から俺への謝罪分の力……

「お前の第一の人生が、幸せなものである」ことを祈る

「ああ……ありがと」

俺は左手を伸ばし、光の球を掴んだ。その瞬間、一瞬だけ強い輝きを放つと、光の球は俺の体の中へと吸い込まれていった。

俺はそれと同時に、ひとつ現象のイメージを作り始めた。俺の右拳を包み込むように、あと俺の手には感電しないように。

「 そして死ねええええええええええええええ…！」

俺はそのまま神様の顔面めがけて突き出した。

「 ……ちっ、効いてないか」

神様は直立不動。目を細めて、ただこちらを笑顔のままに見つめていた。

どうやら光の球を掴んだ時点から、俺の体は別の世界とやらに送られているようで、俺の下半身はすでにこの世界に無い。

そして徐々に俺の体はこの世界との接点を失っていき、完全にこの世界から消滅した。

神様、いつか必ずぶつ飛ばす！

高嶺涼介の去った数秒後の神界。

青い髪の神、セテカは目を細めて、笑顔で、涼介の消えた後もその場所を見つめ続けていた。

実際には、体の芯までしびれていて、眉すら動かすことがかなわなかつたことは、誰も気づかない。

1 - 爬虫類に鋼鉄

目が覚めた。

眠った覚えはなかつたが、俺は眠つていたらしい。風が吹いている。野外だ。地面にはさつきまでいた神様の世界に比べると、かなり肌触りは悪いただの雑草が生えている。

本当に、俺は異世界に来てしまつた……ということか。実感は無いけど、突然目の前にモンスターが現れたりすれば、いやでも実感するだらうな。

ありがちに思えるかもしないが、俺の場合はそれがこれまでの日常だつたわけだ。

考えうる最悪のパターン。それは決まつて俺に訪れる。

立ち上がり、辺りを見渡す。

「……はあ」

俺の背後にはごつい爬虫類がいた。

ワニっぽいけど、でかすぎだろ……しかも後ろ足が……左右に3本ずつ。前足を合わせると、合計で8本の足が生えている。気持ち悪い。

「グオオオオオオ！」

ワニが吠えた。

ちきしきょう。神様のボケ、せめてもつちよつと落ち着ける場所に転生をせろよ。

ワニは8本の足を高速で動かしながら、こちらに突っ込んだ。

「！」、こええええ！…」

背を向けても、絶対に逃げられない。

まずは真正面から敵を見るんだ。でなければ、山で初めてクマに襲われた時のように大変な目にあう。

普通は、真正面から対峙したところで、クマやトラックやワニのモンスターには勝てない。轢かれるか、引っ掻かれるか、食われるかして死ぬ。

だが今の俺には、チート級の戦う力がある。落ち着け、俺は、不運だが勝てる！

とりあえず壁を作ろ。あのワニの突進力がどれくらいか知らないけど、ダンプカーよりは弱い……よな？

目の前に、正方形の鉄製の箱をイメージする。

すると何も無かつた場所に、四角い金属の塊が発生した。

ゴォン、とすごい轟音が響いた。

かなり巨大な鉄の箱、まあ一片が3・4メートルはあると思うんだが、それがずいぶんとこちらに押し込まれた。すごい力だ。

……どうするか、どれくらいのことができるのかはっきりと分からぬんだが……

力なんていう曖昧なものも、イメージすれば創れるのだろうか。

学校の物理の授業で習った程度のものだけど、物体の運動エネルギー。これをこの鉄の箱に持たせることができればいいんだ。

イメージ。驚くほどにあつさりと頭の中で映像化された運動工ネルギーが構築される。

「ふつ飛べ！」

鉄の箱はすごい速さで突き進んでいった。
地面ががりがりと削られている。

すげえ……ちょっとやりすぎかなあとやえ思つてしまつ。

この辺りは見渡す限り何もなく、遠くのほうには山。別の方角を見れば森、まあよく見ると町っぽいものも見える。
だが近くには何もない。ただ草原が広がっているだけ。
だからよく分かる。ものすごい速さで突き進んでいく鉄の箱の行方が。

1キロ以上は……絶対に進んでいる。

ま、あれのことは忘れよう。あれだけの量の鉄だ。ちょっとくらい誰かの役に立つかもしれない。

もし前の世界のぼくがあの先にいたら、100パーセントあれに潰されているんだろうな、と思つとちょっと怖いけど。

「しかしすごいなあ

何がって、俺の能力？ 神様から貰つたが、今は俺の能力だ。仕組みとかは全くもつて分からないうが、頭の中で思ったもの、イメージしたものが本当に現実に出てくる。

俺の力はすごい。それはありがたいことではある。多分。

それで、俺はどうすればいいんだ？

どうやってこの世界で生きていけばいいんだ？

……必要なものは、住む場所だ。

しかし、これは工夫すれば、というか魔法であつと、いう間に家く
らい作れそうだ。

それから食べ物は、魔法で家よりあつさり調達できそうだ。
で、仕事？ 必要無いか。

金。もっと必要無い。

うーん、ぶっちゃけ人間なんか食うものさえあれば死なないから
な。

魔法つてホントすごい。これが使えるだけで生きていけちゃうん
だな。

それで、充実した暮らしがしようと、生意気にも考へるとすれば
……

「家族はいない、やつぱり人と関わりたいかなあ」

住む場所の条件って、日当たりとか、駅までの距離とか、広さと
か、いろいろ言うけど、そんなのどうでもいいと思う。

大事なのは、自分の好きな人と会える、暮らせることがなんだと思
う。

それが無ければ、あんな不幸な人生もつと早くに幕を下ろしてい
たかもしれない。

遠くには、町も見える。

あそこを田指すか。

実際に小さな町のようだ。

で、どうやって行こうかなあ……

歩きは無いな。ただ何もない草原がずっと続いているだけだ。景色を楽しむ要素は微塵も無さそつだし。

となると、せっかくの魔法を使わないほうがどうかしている。何か乗り物が出せればいいけど……さすがに車やバイクの構造なんか知らないし、知識に無いことはイメージできないな。

あ、そうだ。

あれがある。

さつきの鉄の箱ではなく、今度は木製の箱をイメージする。

形は正方形ではなく、平べったい直方体。そして2か所手でつめるような取っ手をつける。イメージが完成すると、目の前にそれが創られた。

そしてそれに乗る。

乗り心地は……良いとは言えないけど、鉄に比べればましだ。いい素材が思いつかなかつたからしがない。

取っ手を掴み、運動エネルギーをイメージする。スピードは、どうしよう。60キロくらいでいいか……

即席の乗り物は動きだした。

「は、はやつー」

体勢が低いため、体感時速はかなりすこい。

前方からのすがすがしいを若干通り越した風を受けながら、俺は時速60キロで草原の上を木製の乗り物で走り抜けていった。

すがすがしい……よりはりよつとせつ過ぎる風を、主に顔面で受

やつぱり距離があるな。

体感速度がいかに速くても、時速60キロ。車で普通に走っていてる程度のスピードだから結構時間がかかる。

……一気にスピードを上げて、余裕を持つて町の手前で止まれば、
大丈夫だ……

何にも面白くない景色を眺めていても、疲れる。

せんが、F1グランプリの超スピード。とりあえず300キロぐら

別の世界が見えた

体が完全に浮いてる！

取つ手をしつかりさせておいてよかつた……けど、これ手を離したら大惨事だ。

町がどんどん近付いていく。そろそろ止まって、後はもう少しつく

イメージ。落ち着け。

止めるんだ。運動エネルギーを消し去る。

イメージはすぐに反映された。俺が作った手作りの乗り物は急停

止してくれた。

そして俺の世界はぐるぐると回り始める。

慣性の法則、というものを知っているだらうか……？
世界がゆっくりになつた。

これは何度も経験したことがある、走馬灯というやつだ。ただこれまでの人生は、振り返りすぎてもう振り返ることもあまりないので、俺は慣性の法則について振り返り、復習を始めた。

動いている物体は急には止まれない。

例としては、電車が停車する時、体は電車の進行していた方向に進みそうになる。この現象だ。電車は比較的ゆっくり止まってくれているので、あれぐらいで済むが……

時速300キロで走っていた物体が急停止した時、乗っていた人間がどうなるかと言えば

そのままの勢いで前方に吹っ飛ばされる。

そうなればどうなるか。運が無いとDEATH。
俺は基本的に不幸体质である。

やばいやばいやばいやばい。

なにか、クッショーンは無いか！？

綿……だめだ、助かる気がしない。何か無いか……水か！？
ダメだ、水は流れていつてしまつ。それにこのスピードじゃ突き抜けてしまう。そうだ、なら圧縮すればいいか！？
くそ……考へてる間に死ぬぞ……

あ、そうだ。俺が今吹つ飛んでいるのは、俺が運動エネルギーをもつてているからだ。

ならそれを消してしまえばいいんだ。

すぐに実行する。俺の体はその場で静止した。

「痛つ」

地面から少し浮いた位置を飛んでいた俺は、地面に垂直落下。運悪く頭から落ちたが、まあ不幸中の幸いか……

「人はいるみたいだな……」

町は小さいが、人は歩いている。しかし小さな町だな。それに電気も通っていないようだ。

まあそれはそうか。この世界には元の世界のような文明は無いらしいからな。

何人かはこっちに気づいている。そして怪しいものを見る目でこちらを見ている。まあ時速300キロで飛んできた人間だからな……

まあ、とりあえず町に入つて、話をしよう。

俺が町のほうへ歩いて行くと、向こうからこちらに数人近付いてきた。

全員、人間だと思われる。ただド派手な髪の色、そして髪の色と同じ色の瞳をしている。

「何者だ」

完全に警戒されますね。

「えつと……」

「お前の様子はずつと見えていた。異質な魔法を使う、かなり高位の魔法使いと見えるが目的はなんだ？　名を名乗れ、見た目にも異質だ、種族はなんだ？」

「うちはまだ何も言つていないので、すぐこ質問の嵐。ていうか種族つて……」

「名前は、高嶺涼介。種族……日本人？」

「珍妙な名前だ」

「つるせえ、そりゃ文化も違つだらう。」

「タカミネリョウスケだな、そして種族、二ホンジン？　知らんな、聞いたことが無い」

「うーん……そりゃ、まあ、別の世界からきたもので」

どんどん表情が訝しげになつていいく。

そりや立場が逆なら、俺は全力で訝しむさ。とりあえず「うちは頭がおかしいと判断して、病院に連れていくか警察を呼ぶだらう。」

「お前、頭でも打つたか？」

違う！

まあ正しい反応だけど、俺が言われてもそういうと想つけど。俺は本当に一度死んで、この世界に転生したんだ。

「いや、頭は大丈夫だ。これで正常だ」

「……到底信じられない、が……お前の異質な魔法。そしてその異質な姿から、完全に否定する」ともできない。……」

異質な姿はひどくないか？

お前らと俺の違ひって……髪の色の違ひくらいしか無い気がするんだけど、あと瞳の黒田の色か。それくらいじゃないか？

「とりあえず、中で話を聞く。ついで来て」

めつちやくちや警戒されたままだけど、とりあえず町の中には入ってくれるらしい。

「いいか。少しでも妙な真似を見せたら、即攻撃する」

「あー、はー」

絶対しないよ。そんなことする利益が全くないし。

しかしここまで警戒するものなのかな……

まあ見た田があやしくて、時速300キロで町の入り口まで飛んできた男を警戒するのは当たり前なんだけど……

なんか警戒し過ぎな気も……やつぱり日本とは違つてしまふとかな。

「おわつー」

何かに躓いた……？　いや違う、靴紐が解けてやがった。それを逆の足で踏みつけたまま歩こうとしたから、体が前のめりに倒れてそして、赤い髪の兄さんを両手で突き飛ばしてしまった。

なんだそりゃ。タイミング悪っ！

「貴様！」

「いや、ちがつ　　」

抗議は聞き入れて貰えなかつた。

赤い髪の兄さんは、両手で輪を作り、そして輪の中に青白く光る雷の球を生成していた。もうめちゃくちゃ戦闘モードだ。

しかし、赤い髪だからてつきり炎でも使つと思つてたな。いや、そんなことどうでもいい。

とつあえず、創ることも消すことも魔法はできるんだから消すことはできるはず。

雷の球を消し去るイメージを……

消えない？

「ぐあつ……！」

雷の球が直撃した。

何度か喰らつたことのある、スタンガンの衝撃のよくな、だがそれよりもかなり強い。

激しい痛みとともに、全身に痺れが広がる。

立つてゐることができなくなり、その場に膝をつく。

なぜだ。なんで消せないんだ？　他人が魔法で創りだした現象だつたからか？

「魔法で防御するわけでも、回避するわけでもない……どうこう

「」とだ？　かわせなかつたところわなじやないだろ？

かわせないから、防御しようとしたが失敗しました。

「戦ひ……つもつは、無いから……」

「なに……？」

「今の……躊躇いた、だけ……」

「渾れてつまく喋れもしない。」

なんか、転生してなお、そりや転生前よりはマシだけど不幸体质のままの気がするだ。

「……それは、すまない。早とちりだった

怪しみながらも、申し訳ないと謝ってくれた。

……これだと、ひやんと話せばわかってくれそうだ。

「じやあついて来てくれ

「あ、待つてくれ

「……？」

全員が振り向き、俺を見る。

渾れて歩けないんだ。

それが通じたのか、赤い髪の男は俺に肩を貸してくれた。

どうにかそれで、町の中に入る「」とまできた。あとで、べつやつ

て俺の主張を信じてもうつかだな
.....

3 - 室内で花火は禁止

町は中に入つても大きな建物や、派手な建物は無くやつぱり小さい。

小ちんまりしていると言つておひい。なんか小さい小さいって言うのは失礼な気がする。

建物の形は、どれも元の世界の家とは違う形だ。
なんといふか、小ちんまり。

その町の中のほうに、他の建物とは明らかに違う、大きな建物が。

「ここだ」

だと思いました。

そして俺は、この建物の中で、背の低い白銀の長髪のなんか
端整な顔立ちの男の子と話すこととなつた。

この子がこの町の重要な、お偉い人物であることはだいたい分かつたが、俺を怪しんでいるといふのに警備は誰もいないといふのは、この子が信頼されているつてことか、俺が信頼されたつてことか……
前者だろうな。

「とりあえず」

ものすごいソプラノボイスで男の子は喋りはじめた。
女の子だと勘違いしてもおかしくないレベルだ。といふか容姿も
そんな感じだから、間違えてもおかしくなかつた。

なぜ俺が自信を持つて男の子だと言えるか。

それはこの部屋に入る直前に、赤い髪の男に念を押されたからだ。
『部屋の中にはいる人は男だ』と。妙に真剣な口調で。

「私の名前はルカ。よろしくな」

「よろしく。俺は高嶺涼介」

「……長いな」

この世界には、もしかすると苗字といつものは存在しないのかな

……

「なら涼介と呼んでくれ」

「そうじよひ、リョウスケ。お前は異世界からきたと言つたな？」

「ああ」

「それを嘘だとは言わない。いや、言い切れない。お前は何か、別の世界から自分がやつてきたと証明できるものを持つていいんだ。

……そう言われても、何かあるだろ？

今手持ちにあるものは、100パーセント繋がらないであろうケータイ電話……そうか、文明が無いんだから、機械を見せねばいいんだ。

ポケットに手を突っ込んでみる。

無い

「あれ、落としたかな……」

「……無いか？」

「すまん、無くしてしまった」

ルカはうーん、と考え始めたがすぐに顔を上げた。

「お前のその黒い髪、そして黒い瞳はこの世界では珍しい。というかそんな種族の存在は確認されていないんだ」

「そうなのか？　俺のいた世界じゃ、黒い髪は珍しくもなんともなかつたぞ」

「……黒い髪は、魔力を全く持たない者の髪の色だとされている」

「へえー……」

「魔族の髪の色と瞳の色は、生まれもつた魔力の量で決まる。魔力の才能がある者ほど、髪の色は白に近い」

つまり、その逆の真っ黒な髪は魔法の才能が全く無い者、魔力を全く持たない者の髪の色というわけか。

もともと魔法なんか無い世界で生まれた俺だつたら普通だ。

……てか、魔族？

それってどういうことだ？　この世界の人間は魔族と呼ばれているということか？

「リヨウスケ、お前はどんな魔法が使える？」

「どんなと言われても……なんでもできるが」

俺がそういうと、ルカは実に怪訝な表情になつた。

「なんだ、リョウスケは魔王か何か？ 魔法は即席で使える代物じゃない。精神修行と膨大な知識、それに魔力がかけ合わさってようやく使えるものだぞ」

そういうえば、俺の魔法はこの世界でいう一般的な魔法とは違つと、あの神様が言つていたな。俺の魔法は神様の魔法に近いわけだ。

「俺の魔法はちょっと異質、というかなんというか、この世界の魔法とは違つみみたいなんだよな」

俺がそういうと、ルカの表情が一変。まるでおもちゃを見つめた子供のように輝きはじめる。なんだ、ビビッたつて言つただ……？

「では、その魔法を見せてくれ！ その異質な魔法こそが、リョウスケが異世界から来たといふことの証明になるだろ？！」

それが一番手っ取り早い。しかし、異質な魔法といふとどんなものを見せればいいのだろう。

「分かった

何とかなりそうだ。話がちゃんと通じて助かる。

とりあえず俺の魔法を披露するために、場所を移すことになった。

途中ルカとは離れた。

そしてかわって俺のもとにまた派手な髪の色の人がやってきて、「急いで準備しますので、お待ちください」と言われた。綺麗な女人だ。

なにやら冷たい飲み物と、おしゃべりなケーキっぽいものまで出してもらつて、さつきまでとは待遇が違います。これが、幸運といつやつか……幸せすぎで死ぬんじゃないか？

ああ……これ、おいしいや。

飲み物のほうは……にがい……けど、甘いケーキにはよく合ひ。これは「コーヒー」だな。

「おかわりお持ちいたしましょうか？」

なにこの乐园？

とりあえずいただく。

待てよこれ、このパターン前にあつたぞ。確か修学旅行先で、こんな風にいろいろ出してくれるから、パクパク食べてたら凄まじい代金請求されて命からがら逃げたっていう。

それにぼくは綺麗な女人が絡んでハッピーエンドだったことは人生一度も無い……

「あの、すいません」

一応、確認しなければ。

「「れつて、無料、ですか？」

「はい。お客様ですから、これくらいは当然のおもてなしです」

「楽園キター！」

俺今だったら自分が本当は死んで、ここは天国、もしくは死の直前に俺自身が見ている幻想の世界だとしても納得できる。てかそれでも構わない。

俺が全部食べ終わつたくらいに、ルカがこつちに来た。

「準備ができた。では頼む」

ルカに言われるままに歩いていく。一体何の準備をしていたんだろ？

どうやら別の建物らしい。

妙に大きな建物の中に案内され、俺は扉をくぐり、薄暗い通路を通り、そして広い部屋に出た。

ああ、やつぱりここは紛れもない現実なんだ

「異世界の大魔法使い！ タカミネリョウスケ様の大魔法ショー！ 第一回、始まりです！！」

即席でセッティングしたと思われる、ステージ。そして満員のお客様。

なんか待遇が良すぎると思つた。まさかこんな裏があつたとは。

「思い切り盛り上げてくれたまえ」

ステージの端のほう、お客様からは見えない場所で俺を見ているルカ。いやいや、おかしいだろこれ。どう考へても展開早くないか?

「俺、警戒されてたんじゃねえの?」

「ああ、私と顔を合わせるまでは、な。今は信用している。これはいわば歓迎パーティのようなものだよ。だから盛大に盛り上げてくれ」

「なんで歓迎される側の人間が、盛大に盛り上げることを考えないといけないんだよ!」

「……それもそうだが、私たちはリョウスケが敵ではないと確信しているが、まだ異世界から来たとは信用しきれないでいる。だからここで、格の違いを見せつけてくれたまえ」

「……は?」

「異世界から来た、敵無しの大魔法使いつぶりをな

話が飛躍しそぎていい!

困った、俺はどうすればいい。これまでの人生、ステージを一人で盛り上げるなんていう大役、こなしたことが無い。

「ドカンと一発、頼む

俺がおどおどしているのが伝わったのか、端からルカが指示を出してくれた。

ドカンと一発、盛り上がる……といえば、あれしかない。だがそれをするにはここは明るすぎるな……よし、まずは闇を作ろう。

光を遮断する黒煙をイメージ、そしてそれを部屋の側壁、天井に這わして行く。

全ての窓が闇にふさがれて、部屋に真っ暗な闇が訪れた。

そして、ドカンと一発盛り上がるといえばこれ、夏の風物詩、花火。

夜空にうすりあがる、大量の打ち上げ花火。イメージし、天井近くに打ち上げる。

ひゅるるる、とおなじみの音を部屋中に響かせながら天井に上がっていき、そして大きな音とともに光の花を咲かせた。

「おお……これは、すごい……」

ルカが仮想夜空を見上げてつぶやく。お密さま方からも歓声が上がっている。

……なんか、焦げ臭くねえかなあ……

いやな予感がする。

俺が創りだした黒煙に混ざつて、明らかに違う、普通の煙の臭いが漂つてくる。

あ、これミスったな。
ルカも気づいたらしい。

「あれ、これ建物が燃えてないか?」

よく見えないから、魔法で創った黒煙を消滅させる。すると天井がめらめらと燃えていた。

「ああ……燃えてるな」

「これはまずくないのか？」

まずいですよ、とてもやばい。これから信用してもうおつりに、早速何をやらかしたってこれ放火ですからね。ああー、ちきしそう。室内で花火はやるなよ！

とりあえず炎を消し去る。すると会場がどよめいた。

「い、今何をした！？」

ルカがこれでもかと言わんばかりに田を見開いている。

「何って、炎を消したんだけど」

「リョウスケの魔法はそんなことまでできるのかー？」

……炎を消すといつのは、すごいことだったのだろうか。

どうも、そつだつたらしく。

炎を消滅させる魔法を使えたといつことが決め手になり、俺は異

世界の大魔法使いと認められた。でも、俺は大魔法使いじゃなくも
とはただの高校生なんだけど。

ていうか、異世界の大魔法使いつていう一つ名は、正直恥ずかし
くてしょうがない……

が、まあ、町の人の信頼は得ることができたらしく、俺はこの町
で暮らし始めることができそうだ。

……なんか、物事が順調に進み過ぎて怖い……

ダメだ、不幸生活が長いから、もう不運じゃないと異常にすら思
えてしまつ。

4・大魔導師の本領發揮

町で生活することになつて、俺は部屋を貰つた。

それほど広い部屋ではない。しかし、紛れもない俺の部屋。この町の宿舎にあつて、まあいろいろな事態に使われる部屋だそうだ。

まさかの、一人暮らしスタート。

なのだが部屋にはルカが。

現在俺はアバウトにこの町の、この世界の現在について聞かされている。もうアバウトすぎて何が何だかさっぱりだ。

要約すると、とても不安定な状況で、いろいろな要因が飽和して、なんとか均衡状態を保っているそうだ。なるほど、分からん。

「この世界にはいくつかの大國と、それに支配されている小国と、その関係から抜け出して独立して都市を形成している独立都市国家が存在する」

「なるほど、分からん」

「……続けるぞ。大国は分かるな?」

「大きな国だ」

「小国は?」

「小さな国だ」

「その通り」

本当にそんな理解で良いのだろうか……

「そして独立都市国家だ。私たち独立都市国家ミッドガルドもこの勢力に当たる」

独立都市国家ミッドガルド。これがこの町、というか都市国家の名前といふことらしい。

「大国同士は……戦争を続けていた。そして小国や、そこに住む国民たちは大きな負担を強いられている。最悪の状況だ、いやそういう状況だった」

「といふことは現在は？」

「大国のために小国が負担を強いられるという状況に変化はないが、今現在大国同士の表立った戦争は行われていない。といつても、何か小さな火だねでもあればそれが大戦のきっかけとなりかねない危ない状況ではあるがな」

うーん……

聞く限り、元の世界よりも数倍危険な世界にしか聞こえない。

「そこで、私たちのよつな独立都市国家だ。私たちは、規模は小さく、数も多くは無いが……一つ一つが、腕利きの魔法使いをそろえた、いわば武力国家のようなものだ」

つまり、町にいるのは誰しもが強い魔法使い。当然ルカも……と

そういうえば髪の色は白に近いほど魔法の素養があると聞いたけど、それで考えると銀色の髪のルカは相当の魔法使いなんだろうな。

「独立都市国家じうしへ、繫がっている。そしてこの繫がりこそが、大国をけん制している」

「……どうじうじだ？」

「私たち独立都市国家は、独立している。つまりどの国の中でも、どの国上にいるわけでもない。常に同じ高さから大国の動きを監視している。そして、大国が行き過ぎた動きを見せれば、私たちは共同戦線を張り、他の大国とも協力し、行き過ぎた大国に攻撃する」

……思っていたより、この世界は危険かもしれない。

話し続けるルカは無表情で、辛いのか悲しいのか、それとも無関心で興味が無いのか分からぬ……

「こんなところだ。この世界は、安定しているように見えるが実情は違う。いつ崩壊するか分からない。ミッドガルドを離れるような時は気をつけろよ」

ルカはそういうと、俺の部屋から出でていった。
最後にはまた柔らかい表情に戻っていた。

……さて、改めて、まさかの一人暮らしが始まつた。

独立都市国家ミッドガルドでの仕事というと、他の独立都市国家

や小国、たまに大国からの仕事の依頼を受けて、それをこなして報酬を受け取るというものらしい。

俺はどうやら、ミッドガルドでは即戦力兼最強の仕事人という認定をされてしまっている。今度でかい仕事を回してやる、とか言われたけど、そんなもんいません。

ということで、暇なので部屋で寝ていると、部屋のドアをノックされる。

そして俺が何か答える前に、人が入ってきた。

「失礼します」

ああ失礼だ。

だがそんなこと口に出せないので返答する。

「どうだ？」

入ってきたのは、プラチナブロンドの長い髪の女性。顔は綺麗、クールビューティという言葉が似合うだろうか。こういう人と関わると、苦労することは18年間で知った。

さて、どうなるか。

「私は、リーチュといいます」

名乗られた。ならば名乗り返す。

「俺は涼介「知っています、ここにあなたの名前を知らない人はいませんよ？」

そうでした。

「リヨウスケさんにお仕事があります」

「ほう、俺にやつてくる仕事というと、どんな仕事だろ? ルカは俺にはでかい仕事を回すと言っていたから、そんなに簡単じゃないんだろうな。」

いや……だなあ。

「内容は?」

「えっと、これはルカからの依頼ということなんですけど……」

「ルカから? それならさつきなぜ伝えなかつたんだろ?」

「今日は魔法部隊の演習なんですが、その相手を一任したい」と

それはつまり、部隊〜俺ということだろ? か。

「死なない程度に遊んでやつてくれ、と」

ルカ、俺が死ぬから。常識的に考えて、部隊って名前がつくるものに単身で勝負を挑むところのはおかしいだろ? 。

「えっと、演習開始は10分後くらいです

「は、はええ!」

「ルカの思い付きですか?」

思い付きたよー。どうりでわざと言わなかつたわけだ。

「めりやくちやだな……」

「ええ、可愛いですよね……」

「え?」

ん、なんかこの子がぼーっとしているけど、気のせいだよな?

10分後。演習場、といつも前の森の中。これ絶対にルカがいま思いついたんだと思つ。

なんだか魔法部隊の人たちも、あきれ果てた表情だ。これはきっと、演習場が即席すぎるこことや、そもそもほとんどしてなかつたと思われる演習が突然行われたことでもなく、きっとルカの突然つぶりに呆れているんだと、なんか分かつた。

そして、魔法部隊の先頭、リーチェさんが立つてゐる。

その目は最初のクールな目つきでも、一瞬垣間見えた気がしたぱーつとした目でもなく、殺氣に満ちている。

魔法部隊の人たちも、俺の姿を認めるとその目をさらつかせ始める。

「行くぞー! 演習だからといって、手は抜かん! 覚悟しろー!」

……え？ リーチュさんキャラ変わりすぎじゃねえ！？

……しかし、どうしたものか。いまいち魔法の使い方はよく分からないんだが……

「吹き飛ばせ！…」

リーチュさんの声が森に轟く。

すると直後に、轟音が、そして木々が揺らいでいる。これは、風が来る。というわけで風を防ぐために、鉄の箱を出現させる。

だがそれもむなしく箱もろとも風に吹っ飛ばされた。

「ぐはっ！

地面に背中を打ちつけた。

あり得ないだろ。どんな強風ならば一辺約3メートルの鋼鉄の直方体を軽々宙に浮かせられるんだよ！

……しかし、本気なら、いつちも本気で行かないと。じゃないとマジで殺される。

「お前ら、ちゃんと防御しろよ！…」

俺の一言に、魔法部隊の全員が身構える。

とりあえず、背中がすごく痛かつたから、軽く仕返ししよう。突風をイメージ。威力は今のぐらい。つけついで、鉄の箱が軽々宙を舞う程度の力を持つた突風。

発生地点は俺の目の前。

「吹つ飛べ！」

俺の声、そして轟音。

さつきと同じ現象が逆の向きで起こる。大人数の魔法部隊全員が宙を舞い、それぞれ木に激突したり地面で腰を打つたりしている。ざまあみる。

「う……まさか、一日見ただけで私の魔法を……」

リーチュさんが悔しそうに呻いている。

「やはり魔王……」

「鬼だ」

「異世界の大魔導師……」

「鬼畜道化師……」

俺の評価がすごいから、ただの化け物に落ちていっている気がする。てか最後のは違う気がする。

「相手が誰でも、俺たちは負けねえええ！」

真っ先に強者に叩きのめされるタイプの人人が、片手に雷を纏わせてバチバチいわせながら走つて突つ込んできた。ので、こちらは雷を離れた距離から放つ。

「ぐえつ」

死ぬほどの強さではないが、そこそこの強さの電流が全身に流れ、突っ込んできた人はその場に倒れた。

倒れているその姿は、いつかの生物の授業で犠牲になつたつぽい力エルとよく似ている。

緑の髪の人が奇声を上げながら突っ込んできた。

ちよこと待て　こい一完全に悪役じゃなしが

悪役にしか見えない人は、オレンジ色の光る球。大きさは野球ボールくらいのものを手のひらの上に生成し、こちらに投げつけてきた。

それほど速くは無いので、横に動いてかわす。すると直後に、後方から爆音が響いてきた。

手榴弹？

「こ、殺す気か！？」

「キシエエエエエエエエー！」

「ああ、もう駄目だこいつ」

駄目っぽいから遠距離から、そいつの足元辺りに爆発物を生成し、爆発させる。

戦隊モノでよくありそうな爆発が起き、
高く舞い上がり、地面に落下した。

俺 TUEEEEERE !

「勝てない……のか」

うーん、しかし圧勝しすぎかなあ……
これはルカの思い付きだけど、演習だつて言つてたし。

「よく、耐えてくれた。後は任せろ」

どこからかルカが現れた。

何このタイミング、そしてこの空氣。ヒーローは遅れてやつてきますつてか？

俺は人生ヒーローになんかなつたこと無いさ、てかヒーローがどんな状況でも助けに来てくれたことも無いさ。消防車すら来ないから、火自分で消したよ。

「ルカ……」

なんかリーチェさんの目がまたぱーつとしている。
そうか、こいつが、リア充か。

「リョウスケ、私が相手だ」

……てか、俺が敵ですか？

いつの間にそんなことになつたのか、俺には全く分りません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9307m/>

異世界ライフは幸せだろうか

2011年8月10日10時15分発行